MOVIN

高岡デザイン情報誌［ムーヴィン］

［特集］
Takaoka Design Movement ❷

高岡とクラフト

［技・ヒト―モノづくりの情景（シーン）／塗師］
［私のグッドなプロダクト］森山明子
［私と高岡クラフトコンペ］金子透

1998 VOL. 7

街角デザインフォーカス

『高岡おとぎの森公園』は、「自然と遊び、自然に学び、友とふれあう」をテーマに整備された子供のための公園である。広さ11.2haの敷地中央を千保川（一級河川）が流れる大胆な構成で、子供たちが安全に自然とふれあうことのできる仕掛けが随所になされている。シンボルである"おとぎの森館"は、大地に根を張る樹木をイメージしており、大きな葉をいただく円柱の屋根までの高さは32m。開放感あふれるアトリウムガーデンからは美しい緑が、訪れる人の目を楽しませてくれる。昨年秋には、50m滑り台をメーンとした大型遊具が新しく仲間入り、愉快なおとぎの世界は子供たちの夢をさらに大きく育んでいく。

※表紙写真：高岡おとぎの森館（アトリウムガーデン）

高岡デザイン情報誌［ムーヴィン］
VOL.7　1998年3月31日発行

写真提供・取材協力

相川繁隆
天野漆器株式会社
イナダデザインスタジオ
内島正雄
金子透
銀雅堂
株式会社クレア・コーポレーション
黒田昌吾
国立高岡短期大学
「今日の北欧と富山の未来」実行委員会
助野靴下株式会社
高岡クラフトショップ・フォルム
高岡市建築指導課
高岡商工会議所
高岡市緑花対策課
高岡銅器団地協同組合
株式会社タカタレムノス
株式会社竹中製作所
伝統工芸高岡漆器協同組合
伝統工芸高岡銅器振興協同組合
富山インダストリアル・デザインセンター
社団法人富山県デザイン協会
富山スガキ株式会社
株式会社ニューズ・インターナショナル
畑勝日佐
森山明子　（50音順・敬称略）

STAFF

Published by　高岡市中小企業課
〒933-8601　富山県高岡市広小路7-50　TEL（0766）20-1285
Executive Editor　MASAYOSHI KIMURA
Art Director　HIDEAKI SOUMA
Designer　YUKIKO AZUMA
KAZUYA NAKAJIMA
TAKAKO NISHIKAWA
NAOKO MASUYAMA
Writer　RIE MORINAGA
MASAHIRO YOSHIZAKI
Photographer　YOUICHI ISHIHARA
TOMOAKI KANATANI
EIJI HONBO
Printed by　相互企画印刷㈱

MOVIN'<ムーヴィン>は、MOVINGの略形で、「動く」・「進展する」・「感動させる」という意味を持ちます。

デザイン情報誌<MOVIN'>は、高岡の街や人、企業そして行政の動きを"デザイン"というアンテナでキャッチ、ユニークな切り口でご紹介します。
また、MOVIN'は高岡独自のデザインパワーを市内外に発信していくとともに、高岡の未来に向けて「新しいデザインの動き」を生み出していく情報誌を目指しています。

ISSN　0918―711

内島正雄氏の
高岡'96クラフトコンペ奨励賞受賞作品
『器Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ』

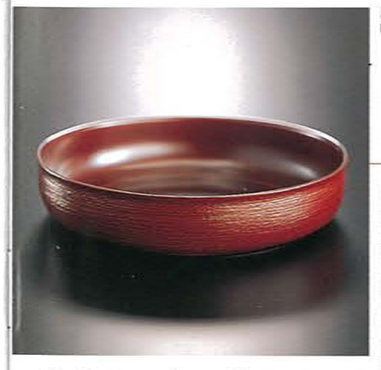
高岡とクラフト

Takaoka
Design Movement
2

今年で十三回目を迎える「工芸都市高岡クラフトコンペ」は、いまや国内屈指の規模を誇るまでに発展した。このクラフトという波は、銅器、漆器をはじめとする伝統工芸の街「高岡」にどのような影響を与えたのだろうか。出品者や関連する企業にクラフトコンペの影響や成果などを聞いてみた。

上)高岡'97クラフト東京展会場
新宿OZONEプラザにて

左)高岡'97クラフトコンペ審査風景



形も自らの手による、
内島正雄氏の乾漆作品

職人とクラフト

高岡クラフトコンペには、地元で伝統工芸に従事する職人からの出品も多い。いまでは、入選、入賞の常連といわれる漆職人の畑勝日佐氏と内島正雄氏に、クラフトをどのようにとらえていらっしゃるかお話を聞いてみた。

畑氏は一九九三年(第八回目)、内島氏は九〇年(第五回目)からと、どちらも途中からの応募である。「職人が出品するのは、何か場違いな感じがした」(内島氏)、「何を作ればいいか、しばらくわからなかった」(畑氏)というのがそれぞれの理由だ。だが、どちらもクラフト展には初回から足を運び、漆器をはじめガラスや陶器、金属といった作品を見るだけでも、作り手として大きな刺激になったと振り返る。コンペの意図や伝統工芸品との違いを理解するまで時間を要したが、伝統工芸品もクラフト商品も「使ってもらう」という意味では変わらない。ただ、現代の生活スタイルや住空間を重視しなければならないというのがクラフトに対する共通する見方だ。そのためか、両氏とも漆の伝統的な朱や黒にこだわらず独特の色で表現されたものが多い。

畑氏のクラフトは、織物の格子やカスリのような表現が印象的だ。しかも、沈金技法を用いて奥行き感のある深い色合いを特徴としている。この色合いにこだわっておよそ十年というから、少なからずともクラフトコンペの影響を受けているといえるだろう。出品を重ねていくようになり、伝統工芸品よりもクラフトとの波長が合うと実感し、今後はクラフト商品をもっと作っていきたいという考えだ。「これまで、仕事のほとんどは問屋さんからの依頼でした。でも、少しずつですがコンペ作品の注文が入っています。

購入者の顔が見えるようになり、使い手の顔を描きながら作るようになりました」と仕事に幅が出てきたと話す。また、入賞を機に各地からクラフト展への誘いも多くあったという。「これまで地元中心の展覧会にしか出品していませんでしたが、高岡のクラフトコンペはいろんな部分で私の視野を広げてくれた」と結んだ。

クラフトのために新しい技術を習得

内島氏は三十年ほど前から全国漆器展に出品を重ね、毎回上位に入賞するなど高い評価を得ている。同展は、漆器を産業品として評価するもので、技術や形はもちろん価格を含めて審査される。クラフトの素地はここでも養われたのだろう。また、クラフト作品を作るようになり、形を木地職人に依頼するだけでは満足できず、自分の手で自由に形を作りたいという思いが日増しに強くなってきたという。タイミングよく三年前に高岡市が開催した「伝承技術研修会」で乾漆技術を習得する機会に恵まれる。乾漆の製作方法は鋳造に似て、粘土で作った原型を石膏で型取りし、器を漆と和紙や麻布で形作るため、自分の思うような形を表現できる。最初の乾漆作品は伝統工芸富山支部展で最高賞を受賞。その後、日本伝統工芸展では連続入選を果たしている。

「クラフトと向き合ったことで、職人はただ伝統技術を自慢するのではなく、現代の住空間の中で何を作るのか、素材の特長をどう技術で表現していくか、コストを含めて考えるようになりました」(内島氏)と、技術に対する意識の変化を語る。

デザイナーとクラフト

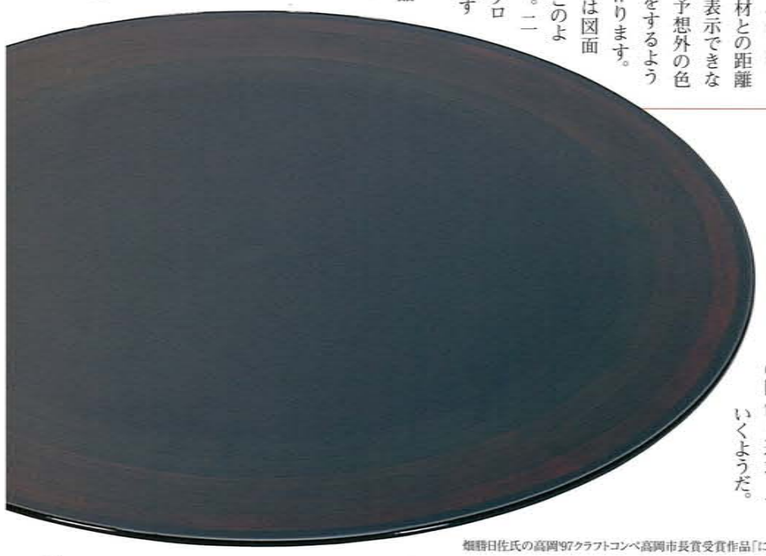
相川繁隆氏は、地元の銅器関連の企業でデザイン室長を務め、伝統的な作品からプロダクト製品、さらには都市空間や建築空間に関連するオリジナル部材など幅広い製品づくりに携わっている。高岡クラフトコンペではグランプリ、金賞をはじめ数多くの入賞・入選を果たし、また各地のクラフト展や文化展などでも多くの受賞歴を持ち、クラフト作家としても知られている。

自らをクラフト・プロダクトデザイナーというように、両方のジャンルでデザインをしている。だが本人はクラフトとプロダクトとは区別していないとのこと。「違いをあえて述べるなら、素材との距離にあると思います。クラフトは図面で表示できない計算外の変化、例えば着色途中で予想外の色に遭遇してそこで止めるという判断をするように、素材の可能性を見極めながら作ります。しかし、プロダクトの場合、色や素材は図面の中で記号化されて生産されます。このように素材との距離に違いがあります」。二つの領域は混沌としており、一部がプロダクトであったりクラフトでもあったりする。時には複雑に融合し合うという。

「高岡クラフトコンペに出品した作品はデザイナーというスタンスで取り組んでいます。これまですべて金属作品でしたが、過去に一度だけ漆器を出品したことがあります。漆は自分で塗れませんが、デザイナーとして関わりあえることをアピールしたかったのです。漆は職人さんだけの世界ではないこと、そしてクラフトとプロダクトの混沌とした領域があることを提示したつもりです。シンポジウムで審査員の黒川雅之さん(建築家・プロダクトデザイナー)から『プロダクトの要素が強く、これからの高岡クラフトコンペの方向性を示しているようだ』という評価をいただきました。私の意図を理解していただきとてもうれしく感じました」(相川氏)。

今後は、いろんな意味で自分を壊していく作品づくりにチャレンジしたいという。「例えば鋳造でありながら部分的にアルミやガラスを使ったりといった素材の浮気をしていくこともその一つかも知れません」と、これからもデザイナーとクラフトの関係を追求していくようだ。

相川繁隆氏の
高岡'91クラフトコンペグランプリ受賞作品
「蒼柱(そうちゅう)」



畑勝日佐氏の高岡'97クラフトコンペ高岡市長賞受賞作品『にじいろのパーティーⅢ』

高岡クラフトコンペについて

正式名称は『工芸都市高岡クラフトコンペ』。高岡市が全国に向けて工芸・デザイン情報の発信基地となることを目指し、産業界、商工会議所、行政が一体となって1986年より毎年開催している。

これまで12回を重ね、当初より募集要項には「適正な価格で販売可能なもの」「美術工芸品を除く」という条件を明記し、現代の暮らしに密着したコンペであることを主張し続けている。審査員は既存の美術工芸品の在り方にとらわれない、建築家、グラフィックデザイナー、工業デザイナー、美術評論家などさまざまな分野の専門家で構成されている。

高岡'97クラフト高岡展会場風景

人生を変えたクラフトコンペ

職人でもデザイナーでもなく、クラフトとは無縁だった人が、高岡クラフトコンペでモノづくりの世界に引き込まれた人物がいる。黒田昌吾氏である。大学を卒業後、実家の漆器製造卸問屋で営業や商品企画の仕事に就き、家業を継ぐ道を順調に歩んでいた。営業には技術や製造の知識も必要と感じ、「高岡市伝統工芸技術者養成スクール」で漆工を四年間学ぶ。ここでモノづくりの魅力に憑かれ、後に高岡クラフトコンペでは、金賞が二度、銀賞が一度と毎回のように入賞入選している。その後、八年間勤めた家業の仕事を辞めモノづくりの道を歩むことになる。「高岡クラフトコンペで評価されなかったら、作り手になろうとは思わなかったはず」と言うように、このコンペは彼の人生を大きく変えた。

「最初の頃は、作品の善し悪しもわかりませんでした。クラフトコンペで搬入などのお手伝いをした時に、応募作品を見てきたことがいい経験になりました。クラフトの感触が何となくつかめたのが九〇年頃だと思います」と話すように、翌九一年には初めて金賞を受賞。この作品(朱塗合子)はアイデアが浮かんだものを図面にして、職人さんと打ち合わせをしながら生まれたものだ。「あれは形態先行のクラフトでデザイナー的な立場で作ったものです。今まで作った中では唯一自分でも用途がハッキリしないものです。クラフトは生活の中で使い込んでいってもらうものだと思うし、今は使われる場面を具体的に描きながら作るよう心がけています」。

黒田昌吾氏の
高岡'91クラフトコンペ金賞受賞作品
「朱塗合子」

高岡での受賞をきっかけに、他のクラフト展にも積極的に出品するようになる。「他のコンペでは、芸術的なものや技術面にウエイトを置いているようで、"作品"という意識で作らないとなかなか良い評価を得られません。でも評価が良くても市場の反応がいいかというと、ほとんど展覧会で終わりというケースが多いですね。応募要項の違いかも知れませんが、高岡の場合はその逆です。作品というよりも『使って欲しいもの』を念頭において作りますし、入賞した作品はほとんど販売につながっています」(黒田氏)。

まだまだビジネスと直結していない

高岡クラフトコンペは単にイベントに終始せず、地場産業の活性化という側面を持つ。十三年という歳月を重ねたコンペだが、その効果を企業はどのように受け止めているか―。銅器・漆器業界の企業リーダーにお話をうかがった。

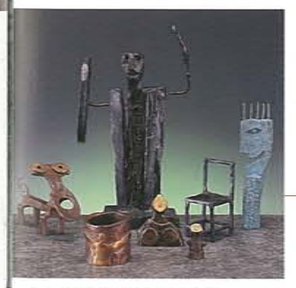
当コンペの発起人の一人でもある竹中製作所の竹中時造代表取締役社長はこう語る。

「個人的には、このコンペによって銅器、漆器、アルミや木工、陶器、ガラスなど幅広い分野の産業育成につながるという、ビジネスに直結したものを考えていました。残念ながら今のところそうはいっていないし、作品が商品として売れているケースも非常に少ない。一部、成果が出ている企業もあるものの、全体から見るとまだまだです。中には産業と直結しなくてもいいという考え方の人もいらっしゃるが、企業は製造して販売をしているわけですし、売れなくては高岡の産業活性化にもなりません。確かに、産業への波及効果はそう簡単に成果が出るとは思いませんが―。しかし、このような状況は我々業界にも責任の一端があると思います」と、高岡クラフトコンペと産業との結び付きの弱さを指摘する。しかし、間接的な効果ついてはこのように語る。「イベントとしては高岡の知名度も上がり成功していると思います。また、デザイナーと企業のつながりも活発になって新商品開発の機会が増えるといった効果は出ていると思う。これまで我が社は早くから著名デザイナーとの仕事を数多くしてきましたが、このコンペを通じて新しいデザイナーとのパイプができていますから」。

続けて「コンペには地元の企業からの応募も多いが、各社が力を合わせて商品を作るといった応募の仕方があってもいいと思う。いずれにせよ、多くの作品が市場でも売れるというコンペに発展するよう、企業としても努力したい」と、クラフトコンペの直接的な効果を望む。

クラフトコンペが企業誕生の引き金に

高岡クラフトコンペが地元の伝統工芸に関わる若手を刺激し、企業設立の誘因になったケースがある。一九八六年、異業種の若手経営者五人でまずグループを結成し、その後、法人化したニューズ・インターナショナルである。八六年は折しも第一回目の高岡クラフトコンペが開催された年である。代表の駒沢義則氏は「高岡のモノづくりの潜在能力をもっと引きだし、独自のブランドを生み出したい」と企業設立の意味を語る。「我々の考え方と高岡クラフトコンペの主旨と通じるところがあって、コンペはまさに渡りに船。異素材の研究ができる情報収集の場です」(駒沢氏)。



㈱竹中製作所と松永真氏の共同製作
「メタルフリークス」
高岡'95クラフトコンペ招待作品

㈱竹中製作所と黒川雅之氏の共同製作
「アクセント ベネチアングラス」
高岡'95クラフトコンペ招待作品

㈱ニューズ・インターナショナルと
デザイナー梅村義徳氏の共同製作
「glass catfish」

高岡クラフトコンペ入賞作品や、
地元高岡のクラフト作品を展示販売している
「フォルム」

第九回のコンペでは同社で開発したオリジナル商品「トーミョー」が銀賞を受賞するなど独自のブランド商品の評価は高い。これまで、クラフトコンペがきっかけで何人かのデザイナーとのパイプもできた。造形作家の志村雄逸氏とはパブリックアートの製作を手がけ、プロダクトデザイナーの趙慶姫氏とはニューズのオリジナル商品を発表するなど着実に進んでいる。

「高岡クラフトコンペは、我々に欠けている商品企画やデザインを学べる場だと言えます。しかも、入賞作品をはじめ地元のクラフトを展示販売するフォルム(10頁参照)というショップができました。フォルムは、私たちのような小さな企業や職人さん、作家さんの販売拠点でありマーケティング機能を担ってくれます。確かに空き店舗モデル事業としての取り組みでスタートし、今は補助を受けながらの運営で、採算面でも大きな課題があります。しかし、今後も継続していけるよう、我々企業もできる限り支援しなくてはならないと思います。理想を言えば将来的にはクラフトコンペの収益部門となるよう機能してほしい…、当面は無理としても。コンペとそれに直結するショップ機能をもった地方都市はとても少ないわけですから」と、駒沢氏はクラフトコンペとフォルムとの新たな関係に期待する。

作品に商品力をつけていくことが企業の役割

「一企業だけでなく、高岡漆器全体に当てはまるのですが、高岡クラフトコンペではデザインの考え方にかなり影響を受けたと思います」と語る天野漆器の天野隆久代表取締役。氏はまた高岡漆器協同組合の理事長を務めている。「毎回開催されるシンポジウムでのお話は、伝統工芸に従事する人々に不足しがちな、新しいものに対する考え方や現代の生活空間のことなど、商品開発を模索する業界にとって示唆に富んだ内容で大変参考になっているはずです」(天野氏)。

コンペ作品の販売状況についてうかがった。「クラフトコンペに入賞、入選した作品がすぐにビジネスに結びつくことは、なかなかありません。むしろ、作品を基礎に企業がいかに商品力のあるものに育てていくかが大切だと思います。また、クラフトコンペの影響で職人さんのモノづくりに対する考え方がずいぶん広がったと実感します。高岡漆器の製造は木地、塗り、加飾という分業ですが、それぞれの職人さんが新しいものを追求しようという姿勢が出てきました。そういう環境が形成されたと思います。私の会社でも漆器組合が黒川雅之氏に依頼した『凡の盆』や、私どもが澄川伸一氏(プロダクトデザイナー)にデザインしていただいた『収納ボックス』や『花器』を販売していますが、商品化にあたって職人さんはデザイナーと仕事をしながら洗練された感覚が吸収できた訳ですし、自分の技術をフルに発揮しながら勉強してきたはずです。このような貴重な経験の中からデザインのノウハウなどを吸収してきたと思います」(天野氏)。

漆器業界ではここ数年、全国的にもクラフト的な商品のウエイトが大きくなっており、産地にどれだけ新しい商品があるかが、デパートなどに対する大きなPRになるという。「確かにクラフトコンペを開催するにあたっては企業の負担もあります。しかしそれには代えられないものを得ていると思います。これまで高岡漆器は重厚な商品が多かったのですが、ここ四、五年でずいぶん変わってきたという声を耳にするようになりましたし、実際にデパート関係の方々が高岡まで足を運んでくださる機会も増えました」と、高岡漆器の新しいイメージアップにも結び付いていると語る。

㈱天野漆器と澄川伸一氏の共同製作
「だんだん」
高岡'97クラフトコンペ招待作品

上塗りの前に、調合した漆を濾す。和紙で漆を包み濾し馬と呼ばれる道具で絞り上げながら不純物を取り除く。

塗師・内島氏は、漆を「生き物」と表現する。
漆は、高温多湿という条件で固まるが、温度が高過ぎると不乾燥を起こし、湿度が高過ぎると表層がちぢむ。同じ漆を使っても、微妙な乾燥条件の違いによってなかなか思い通りの表情に仕上がってくれない。
「機嫌を損ねた漆と上手く付き合っていくのは骨が折れる」と内島氏は、慎重に漆を調合する。日々変化する漆の状態や道具との相性は、刷毛を走らせる一瞬の「漆の切れ」で見極める。熟練した塗師だけが持つというこの独特の感覚が、漆からのメッセージを的確に読み取り、最適な技術と道具を選び出していく。そんな高度なセンサーを駆使した手技には、生きた素材と向き合ってきた内島氏の長い歳月が凝縮されている。

素材とのいい関係。

作品の出来栄えは、漆の調合に左右されるといっても過言ではない。顔料や溶剤など混合物の比重によって、「漆器の命」といわれる表面の色艶がずいぶん違ってくるからである。そのため塗りの作業に進む前に、調合した漆を作業場のガラス戸にひと塗りしておいて、タレ具合から漆の状態を判断しなければならない。

仕上げの上塗りは、空気が落ち着いた深夜、表面に埃(ほこり)が付着しないように息をひそめて一気に塗り上げていく。その厳しい表情からも、乾燥した作品を優しく磨き上げる姿からも、内島氏のモノづくりに対するこだわりや素材への愛情が伝わってくるようである。

モノづくりの姿勢。

内島氏は、仕事の基礎を父・修蔵氏に学んだ。漆を一人前に扱うことができるまでに十年かかるといわれるが、父に師事する傍ら独自の工夫を重ねて数々の展覧会に挑戦した。難易度の高い作品を目指すうちに、新しい技術やノウハウが短期間で身に付いていったという。独自に習得した技術は今も幅を広げ、下地から加飾まで三十以上の工程に使い分けられている。

内島氏のテーマは現代の暮らしを意識した漆器づくり。「漆器は長い年月をかけて表面を硬化させ、使い手が触れることで色艶を深める。そんな魅力を人々の生活の中に伝えていきたい」と話す。その意欲がある限り、熟練の手技と独特の発想に磨きをかけて漆の可能性を広げていくに違いない。

内島 正雄(うちじま まさお)

1942年	高岡市生まれ
1969～93年	全国漆器展富山県知事賞 5回受賞
1970～81年	富山県デザイン展デザイン大賞 2回受賞
1971～74年	全国漆器展工業技術院賞 2回受賞
1973年	全国漆器展徳川宗敬賞 他9回受賞
1978～82年	日本経済新聞社賞 2回受賞
1981～91年	全国漆器展中小企業庁長官賞 2回受賞
1983年	全国漆器展林野庁長官賞
1984年	全国漆器展労働大臣賞
1993年	高岡クラフト展黒川雅之賞
1994・95年	高岡クラフト展奨励賞
1996年	伝統工芸富山支部展工芸会長賞
1996・97年	日本伝統工芸展入選
1997年	高岡クラフト展黒川雅之賞 富山県デザイン展優秀賞
1998年	日本伝統漆芸展

［ヘラ］
ヘラは下地に使う「地の粉」や「砥の粉」を塗り付けるために使う。昔は、ヘラを削らせれば塗師の腕がわかるといわれ、小刀一本を携えて全国の産地を渡り歩く塗師がいたという。作品の形態に応じて数本使い分け、「しなり」が生命といわれる。

［刷毛］
刷毛は、作品の大きさや塗る箇所の形態に応じて幅の広さが違う数本を使い分ける。毛は人間の毛髪が最も適しているといわれ、毛先が痛むと柄の中から新しい毛を削り出して使う。同じ種類の刷毛を数本持ち、温度や湿度の違いに応じて使い分ける。

DESIGN TOPICS

[97年度デザインの動向]

竹中製作所

グッド・デザイン 中小企業庁長官特別賞に選定

平成九年十月、竹中製作所（高岡市）製作の『ダブルオープナーR』が、「平成九年度通商産業省選定グッド・デザイン商品、施設」のグッド・デザイン中小企業庁長官特別賞に選定された。この商品はアルミ削りだしのボディにアルマイト加工を施したオープナー。ワインとキャップ、その二つのオープン機能をコンパクトで明快な一つのフォルムにまとめている。「精密加工技術によりネジ込み部分の精度を上げ、従来品はシルバーであったが、それに酸味のきいたブルーとグリーンの二色を加えた真摯な企業姿勢に異論はなかった。さらに五、五〇〇円の価格を四、五〇〇円に下げた、良質なギフト商品開発への意欲には頭が下がる思いだった」とは山田節子家事・キッチン用品部門審査委員長の講評。

同社はこの他にも、FORUST（オープナー）、GAIA（写真立）、ACCENT WC・A（掛け時計）の三点がグッド・デザインに同時選定されている。

問㈱竹中製作所☎0766・22・0566

ダブルオープナーR　φ2.9×H13.9cm 重量120g

第37回富山県デザイン展

クリエーターの力作に協賛企業も注目

富山県デザイン協会主催の「富山県デザイン展」が、平成九年十二月四日から四日間の日程で開催された。会場となった富山県民会館には、富山県内の出品者から集められた五七三点の作品を展示。そのうち、企業などから課題が提供されたBブロックでは、ドッグハウス（課題提供／三協建材センター）と公共サイン（課題提供／朝日町）の課題賞に高岡市のデザイナーが選ばれた。前回は、奨励賞作品を基にしたクロックが課題提供企業（高岡市・タカタレムノス）から商品化されている。今回、課題を提供した三協建材センターも、諸条件をクリアした優秀作品の商品化を前向きに検討していくという。こうした動きについて事務局では「商品化という目標ができればレベルの高い作品が集まる。協賛企業にもデザイナーにも、より魅力のあるデザイン展になるだろう」と話している。

問㈳富山県デザイン協会☎0766・26・4701

〈㈱三協建材センター賞〉ドッグハウス／金森美紀

〈朝日町賞〉公共サイン／米田美知代

富山プロダクトデザイン・コンペティション1997

企業とデザイナーの新しい関係

四回目を迎えた富山プロダクトデザイン・コンペティション（主催／デザインウエーブ開催委員会）の最終審査（公開）が、平成九年十一月十四日に行われた。協賛企業やデザイン関係者、応募者などが見守る中、デザイン大賞の選定にあたっては例年以上に議論が白熱。最終的には浅野泰弘さん（課題／小さなバスシェルター）と、由茅裕司さん・治田将之さん・美登著拓哉さんのグループ（課題／マンション向け門扉）が揃ってデザイン大賞に選ばれた。

同コンペは、これまでにも四点の作品を市場に送り出した実績があり、平成十年度には新たに前回のデザイン優秀賞作品を基にしたポラードが高岡市の竹中製作所から商品化される予定だ。

問デザインウエーブ開催委員会事務局 富山インダストリアル・デザインセンター内☎0766・25・5039

〈デザイン大賞〉マンション向け門扉／由茅裕司・治田将之・美登著拓哉

〈デザイン大賞〉小さなバスシェルター／浅野泰弘

考え抜かれた空間は、どんな物でも受け入れる。

①ワイングラス（チェコ製）②八角小鉢（明治・染付）③八角大皿（明治・染付）④蕎麦猪口（江戸・染付）⑤蓋付椀（明治・印判）⑥汁椀（浄法寺）⑦大鉢（木曽）⑧箸置（南正剛・作）⑨箸（輪島）⑩茶托（高岡）⑪猪口（佐藤阡朗・作）⑫片口（浄法寺）⑬盆（荻野克彦・デザイン）
森山氏のアパートメント（セカンドルーム／東京・杉並）にて撮影

同じアパートメントに住居とは別にセカンドルームを持って数年が経つ。購入するに当たり全面改装。四十平米程度の何の変哲もない2DKの部屋が、建築家の手によって全く異なる空間に変貌する様は、デザインの力を再認識するに十分だった。感動が依頼主にとどまらないことは、この極小住宅がいったん建築雑誌に発表されると各種メディアが追随したことからも分かるだろう。桜や紅葉を生けての小宴を催したり、人物撮影用の写真スタジオと化したり、海外の知人を招いたりと、使い方はさまざまだ。

さて、この部屋で用いるプロダクトである。ビニールクロスを剥いだ壁、開き戸と引戸の障子、縁なしの畳は、和風ではあるが現代的でもある。物はどうあるのが相応しいか。自然に集まった好きなものを、できるだけ少なく、そんなに気負う必要はない—これが実感である。

漆は浄法寺、木曽、作家のものと、折々にいただいたり自ら買い求めたりしたものを使う。片口に合う漆の猪口に、ある個展で出会えてとても嬉しかった。新米をいただく飯茶碗を陶から漆に変えたときの、一粒一粒が楽々と呼吸して輝く様は忘れられない。陶器の好みはどうしても古いものに傾く。講演などで地方都市に招かれると、まず骨董屋を教えてもらうことをならいとした時期があった。ワイングラスはチェコ製。食器に限れば、海外製品はどこか気恥ずかしくてなかなか使う気分になれないのだが、これは例外である。

高額なものは何もない。宴の主役は人だからだ。

（文／森山明子）

森山 明子（もりやま あきこ）
武蔵野美術大学教授

1953年新潟県生まれ。1975年東京芸術大学美術学部芸術学科卒業後、特許庁入庁。1979年特許庁意匠審査官。1986年に日経マグロウヒル社（現・日経BP社）に入社し、1993年日経デザイン編集長。1998年3月より武蔵野美術大学教授。（財）伝統工芸品産業振興協会デザイン委員会委員、長岡造形大学非常勤講師。主な講演に「デザイン戦略日独比較」（93年、ドイツ・エッセン）、「世界の中の日本のデザイン」（94年、芸術工学会春期基調講演）、「第9回ジャパン<漆>サミット基調講演」（97年、高岡市）、「社会とデザイン」（97年、チリ・日本修好百年記念、サンチャゴ）などがある。

DESIGN TOPICS

[97年度デザインの動向]

高岡銅器のPR誌「銅曼陀羅」を発刊

高岡銅器の歴史や新しい動きを紹介

四世紀近くの歴史と優れた技術を受け継ぐ高岡銅器は、全国的にも稀ともいえる一大鋳物産地を築き、多岐にわたる製品がつくられている。

「銅曼陀羅」(発行・伝統工芸高岡銅器振興協同組合)では、この高岡銅器の歴史をひもときながら、梵鐘や銅像、茶道具、そして現代的な作品などを紹介。また、製造工程や携わる若手職人も登場するなど、さまざまな視点で高岡銅器の魅力を紹介している。全国のデパートや専門店に配布したほか、地場産業の学習用として高岡市内の小学校にも贈呈された。

(問)伝統工芸高岡銅器振興協同組合☎0766・24・9565

工芸都市高岡97クラフトコンペ

クラフトファンの声を意識

全国のクラフトマンから二二五一点の作品が寄せられた97クラフトコンペ。毎回二千点を超える応募が寄せられるなど、すっかり日本を代表するコンペとして定着したようだ。十二回目を迎えた今回は、十一点の入賞作品を含む過去最高の入選作品九〇一点が選ばれた。

前回に続き「新しいクラフトをもとめて」をテーマに開催されたクラフト展は、高岡と東京の両会場に作品を買い求める大勢のファンが訪れた。新宿・OZONEプラザで開催された東京展では、来場者に対して初めてアンケート調査を実施。これについて、事務局では「展示企画の感想について、ほとんどの回答者から『よかった』という声が寄せられた。また、クラフトファンのお気に入りが、受賞作品とは限らない。運営上の課題や消費者ニーズが反映した貴重なデータになる」と話している。次回からは、高岡展でもアンケート調査を実施する予定なので、来場する機会があれば、ぜひ協力していただきたい。

(問)高岡商工会議所内クラフトコンペ事務局☎0766・23・5000

「これからの福祉産業とデザイン」視察研修

富山のデザイナーが北欧二カ国を視察

『今日の北欧と富山の未来』実行委員会では「これからの福祉産業とデザイン」というテーマで、北欧のフィンランドとスウェーデンを視察(平成九年九月二十日～二十八日)。富山県デザイン協会会員を中心とした五五名の視察団は、福祉施設の見学をはじめ、両国を代表するデザイン団体やデザイン事務所、介護機器メーカーなどを視察した。フィンランドでは『デザイン富山inフィンランド』展(会場／ラハティ国際職能大学)を開催。富山県からはデザイナーや企業、各種団体の協力を得て、クラフト、プロダクト、ポスター、パッケージなど計二七五点の作品が展示され、うち一六五点を同大学に寄贈。この様子は現地の新聞に大きく報道され、デザインを通じて両国の交流を図ることができた。また、同大学で「高岡市青年・女性・福祉の翼」の団長として、フィンランドを訪問中の佐藤高岡市長の基調講演が催され、現代社会が直面する問題に対応する高岡市の取り組みや、伝統や文化、デザイン活動などを紹介された。

(問)『今日の北欧と富山の未来』実行委員会(事務局(社)富山県デザイン協会)☎0766・26・4701

高岡漆器のホームページを開設

数々の匠の技が見える「高岡漆物語」

伝統工芸高岡漆器協同組合は平成8年に組合設立20周年を記念した「高岡漆物語」を発行したが、これをベースにしたホームページを平成10年3月に開設した。数々の名工を生み出した高岡漆器の匠の技を物語風に紹介するギャラリーコーナーや、高岡漆器の歴史が町の様子とともに年代別にわかりやすく構成されている。技法などの情報も豊富で、漆器愛好家や専門家にも貴重な資料になりそうだ。今後は、展示会や新製品の情報なども随時追加していくという。

http://www.chuokai-toyama.or.jp/~shikki/

(問)伝統工芸高岡漆器協同組合☎0766・22・2097

高岡クラフトショップ・フォルム

高岡クラフトショップ「フォルム」

クラフトの良さを市民に広くアピール

高岡市の中心商店街・御旅屋通りの一角に、平成八年十月「高岡クラフトショップ・フォルム」がオープンした。「クラフト情報の発信拠点となる店づくり」を目指し、一階には工芸都市高岡クラフトコンペティションの入選作家の作品を中心としたクラフトショップ、二階にはクラフト作家らの作品発表の場「時空」ギャラリーが設置されている。

フォルムは、高岡商工会議所が国の空き店舗対策モデル事業の一環として設けた実験店。同会議所ではこの事業を当面の最重要課題と考え、国の助成終了後も県や市など行政の支援を受けながらフォルムの営業を継続、販売の充実を図っている。

強化策では、平成九年四月、新店長にグラフィックデザイナーの能島史子さん(富山市出身)を迎えたほか、クラフトに精通したスタッフを常勤とし、商品選定や販売戦略など顧客ニーズに対応できる体制を整えた。用即美をテーマとしたこだわりの品揃えは、センスある贈答品を求めて訪れる女性客にも「他にはないモノがある」と好評だ。また、お客様の要望などを伝える作家向けの情報新聞『フォルム通信』を隔月発行。生活に即した意見を基に、新商品をフォルムから提案したり、それに応えて積極的に取り組む作家も増えつつあるという。このほか、ギャラリーを市民にも開放(地元学生は無料)したりユニークな体験講習会を企画するなど、市民が気軽にクラフトに親しむことができるよう、さまざまな試みがなされている。

"いいモノに触れ、発掘し、育てよう"とするゆとり、その意識が広く市民に定着すれば、新しい文化をここから発信する時代が到来することだろう。

(問)高岡クラフトショップ・フォルム☎0766・28・0024

日本の漆器未来会議たかおか

全国の漆器産地から関係者が集結

平成九年五月十四日から三日間にわたり高岡市で開催された「日本の漆器未来会議たかおか」に、全国の漆器産地から行政・業界の代表者が集結した。テーマは〈時空を超えて輝く漆文化〉で、後継者不足や販売高の減少など各産地に共通する問題について、それぞれの立場から意見や情報を交換して活路を見いだそうというものである。初日の「第九回ジャパン〈漆〉サミット」では十五市町村の首長が出席して後継者の確保と育成、新商品の開発、産地振興のための行政施策などを協議。今回は、初めて各産地の業界関係者がオブザーバーとして参加するなど、行政と業界の連携をより強化したサミットになった。翌十五日には、二十二産地十六組合から関係者が出席して「第四〇回日本漆器協同組合連合会全国大会」が開催された。この他、「第三回全国漆器青年交流会」や全国の産地から作品を集めた「明日へ架ける漆・心と技展」など多彩な事業が期間中に実施された。

(問)高岡市商工労働部中小企業課☎0766・20・1285、伝統工芸高岡漆器協同組合☎0766・22・2097

高岡短期大学産業工芸学科木材工芸専攻

国際共同授業で、モノづくりの発想学ぶ

高岡短期大学内で、同短大の産業工芸学科木材工芸専攻とスウェーデンのカペラ・ゴーデン美術工芸学校の学生による国際共同授業の作品展が平成九年十二月に開催された。課題は「各人が一脚の椅子を制作しなさい(五歳児用)」で、両国共通。

共同授業は、同専攻の小松研治助教授が六年前にカペラ・ゴーデンで学んだことをきっかけに始まった。同助教授は「日本の工芸教育は、自己表現を重視する傾向が強かったので、'実際の生活に必要なモノを作ろう'、というスウェーデンの工芸教育に驚いたんです。と同時に、使い手のことを考えてモノを作る大切さを痛感しました。共同授業は、そんなスウェーデンのモノづくりを学ぼうと提案したもの。互いの文化的背景を紹介して知識を増やしてもらうことも視野に入れました」と、共同授業の意義を語った。

制作は保育園で園児の動作を観察することから始め、完成品の感想も聞いて工程説明と併せてパネルにまとめている。高岡短大の作品は十点、スタッキング可能な椅子やお尻に優しい布張りの椅子など、利便性を考えた作りになっている。パネルでの展示となった力ペラ・ゴーデンの作品は十三点、昆虫を象った椅子やブランコ型の椅子など、遊び心がいっぱいだ。来場者へのアンケートでは「日本の手仕事は美しい」「スウェーデンの学生は発想が豊か」などの意見が多く、小松助教授も「使い手の立場を丁寧に考えることができた」と手応えはまずまずの様子。

共同授業は来年度以降も継続していく予定で、現在、新たな企画を検討中とのこと。

(問)高岡短期大学☎0766・25・9111

DESIGN TOPICS

[97年度デザインの動向]

[瑞龍寺]高岡開町の祖・加賀藩2代藩主前田利長の菩提寺として、3代藩主利常が建立した曹洞宗寺院。1646年から約20年の歳月をかけて建築が進められ、日本で唯一、七堂伽藍と呼ばれる典型的な禅宗伽藍を今に残している。幕末の混乱期に一時大きく荒廃したものの、昭和60年から平成8年まで大修理が行われ、当時の姿がほぼ蘇った。

平成九年度高岡都市美景観賞
景観という視点で建造物を捉える

今回の高岡都市美景観賞は、住宅部門と一般部門に合わせて四十四件の応募・推薦があり、グラフィックデザイナーの松永真氏をはじめ七名が選考。住宅部門の最優秀賞には、吾妻建（あづまけん）という伝統的な様式を継承しながら現代的にアレンジした『柴田邸』が選ばれた。「周囲の田園環境に十分な配慮が行き届き、この地域の景観形成に寄与している」と、選考委員会の評価も高い。また、ビルや大規模な施設などを対象にした一般部門では、最優秀賞の該当物件がなかった。

今回の特徴は、柴田邸をはじめ周囲の景観に配慮した物件の応募が目立ったことだ。これについて関係者は「美景観賞では、建物の美しさや規模の大きさよりも、いかに周囲と調和しているかが評価される。今後も個々の建物だけでなく、街並み全体のデザインを考えていただきたい」と話している。

問高岡市都市整備部建築指導課☎0766・20・1429

〈住宅部門〉最優秀賞／柴田邸

高岡山瑞龍寺
日本を代表する近世寺院建築が、国宝に

文化財保護審議会は平成九年十月、瑞龍寺の仏殿、法堂、山門の三棟を国宝に指定した。国宝指定は県内初。江戸時代の技術で建設されたものでは、全国初となる。今回は「近世社寺建築緊急調査」の結果に基づいたもので、対象は全国約一万件。その頂点に立つものとして選ばれたものであることも意義深い。

仏殿（一六五九年に建築）は入り母屋造り、鉛板葺き。巧みな構造と優美な意匠をもつ内部空間に特徴があり、江戸前期の高度な寺院建築技術を示す最も代表的な遺構の一つ。

法堂（一六五五年に建築）は入り母屋造り、銅板葺き。方丈形式に書院造りを加味した構造で、建立年代が古い物として高い価値をもつ。

山門（一八二〇年に建築）は総欅造りの二階二重門。和算によって設計され、軒の出が深く禅宗寺院山門の雄と言える。

いずれも近世の建築技術の高さを示していることはもちろん、伽藍の中央に並びシンメトリックな美しい配置構成となっている点も高く評価された。今回新たに、重要文化財に大茶堂が追加指定され、瑞龍寺の文化財指定は、これで国宝三棟、重要文化財七棟となった。

高岡デザイン・工芸センター（仮称）
新クラフト産業の拠点、いよいよ着工へ

高岡市は平成九年十二月、高岡デザイン・工芸センター（仮称）の建築構想を発表した。

同センターは、地方拠点法に基づく重点事業として、高岡市戸出に造成が進められているオフィスアルカディア事業のオフィス団地「高岡オフィスパーク」に整備する富山県産業高度化センター（仮称）、とやま総合デザインセンター（仮称）に連動した施設で、高岡のデザインや工芸の新しい拠点となる。

建築構想は、新たなクラフト産業やデザインの育成・支援（地場企業との商品開発など）をはじめ、伝統工芸の保存・継承（後継者の育成）、デザイン・工芸の啓発・普及（市民との交流）を役割に据えており、他二センターの機能を相互に補完するとしている。施設では、デザイン・クラフト情報の発信機能としてデザインルーム、サロン、ライブラリーなどを備え、市民との交流機能としては、造形・体験工房なども設置する。

高岡市は平成十年度から同センターの建設を開始、十一年度中にも開設する予定だ。

問高岡市商工労働部中小企業課☎0766・20・1295

高岡市立木津公園
四季の彩りが楽しめる公園づくりで「緑のデザイン賞」緑化大賞受賞

平成九年四月、高岡市が提案した木津公園の緑化プランが、第七回「緑のデザイン賞」（財）都市緑化基金などが主催）の緑化大賞に選ばれた。

この緑化プランは、ヒイラギモクセイやヤマボウシなど、花木を中心とした植栽が特徴的だ。季節毎の開花とともに、初夏の新緑、秋の紅葉、冬の雪景色など四季の彩りが楽しめるよう工夫されている。また、地区公民館に隣接していることから、広場としても利用できるように施設をレイアウト。出入り口には子供の飛び出しを防止するため、コンクリートの化粧擁壁や樹木を配置するなど、きめ細やかな配慮がみられる。

緑のデザイン賞は、緑化を進める全国の団体を対象としたデザインコンペ。地域社会の質的向上を目的とし、優秀な緑化プランには実現のための助成が行われる。高岡市についても同様で、受賞を機に同年木津公園が整備された。現在、住民のコミュニティ広場として地区公民館とともに幅広く利用されている。

問高岡市都市整備部緑化対策課☎0766・20・1419

ブローチ（銀）

雪絵皿（銅、錫）

2 金子 透（工芸家）
わたしと「高岡クラフトコンペ」

「いい機会だから誌上で最新作を紹介したかったんですが、妻の出産でバタバタしちゃって。ごめんなさい、まだ完成してないんです」と照れながら頭を下げた金子さん。

気取らない雰囲気、優しさに、金子さんの代表作と印象が重なった。気負いのない今の時代の気分、生活感が息づいている新しい価値観によるもの、と審査陣を唸らせた高岡'97クラフトコンペのグランプリ受賞作『花器』である。

「本来、形はディテールに無駄がないことがベストですが、今回は敢えて凹凸の装飾を施しました。内側から叩き出すことで花器全体がギュッと引き締まり、強度が高まるからです。と同時に、そんな力強い表情と逃げていく柔らかい表情、つまり金属という素材がもつ強弱の面白みを表現しています」。

絞り作業

素材の良さが生きている。そういうモノをつくりたいと願う。一方、自分の好きなモノだけをつくって妙に芸術することは、どうしても好きになれない。

「形は作っちゃいけない、作られていくもの。素材があって、使い手がいて…いろんな予件を受けとめてはじめて"使いたい"と望まれる作品ができるのだと思います」。

第六回のクラフトコンペ初出展以来、毎回欠かさず入選・入賞を重ねてきた。金属の表情づくりには抜群の感性を持っていると定評がある。本人も、素材から生まれるべき形を探りだす過程を楽しんでいる。そんな金子さんの夢は工芸の良さを敷衍（ふえん）し、より多くの人に自分の作品を使ってもらうことだ。

「作家的な意識だけでなく、企業と提携して、量産ベースを考えながらモノをつくることができたらいいなぁと思っています」。

企業と提携するためには公募展だと自ら考えた。個展などに比べ、来客数が圧倒的に多い。宣伝もしてくれるし、入賞すれば自分の作品がメディアに載る。なかでも地元産業界の活性化を目指すクラフトコンペは、夢実現の可能性が一番高いと感じた。審査員の大半がデザイナーである点も、元プロダクトデザイナーの経歴をもつ金子さんには魅力的だ。だからこそ、同コンペへの期待も大きい。

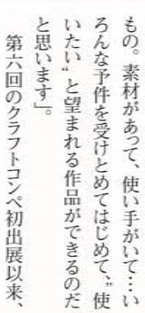
高岡'95クラフトコンペ銀賞「銀椀」

形は作っちゃいけない、作られていくもの。

「去年『高岡クラフトショップ・フォルム』の企画展に参加しました。出展作品は好評で売れ行きも上々。でもコンペ自体の動きはまだまだ鈍いように感じます。入賞作が商品化されるなど、社会への波及効果がもっと現れるといいですね」。

表現したい世界がある。その目標への挑戦。いやむしろ直截（ちょくせつ）に「工芸への欲」というべきだろう。工芸への欲は、陶芸に金子さんを向かわせようとしている。

「陶器は強固で色も多彩、しかも熱伝導率が低いので、金属では表現しづらい点が補えるんです。それに金属と融合させることで、より"いいモノ"ができ上がる作品の幅も広がるような気がして…。今年は陶芸を勉強して展示会を開こうかと思っています」。



ロウ付け作業

いかなることに挑戦しようとも、素材の良さを大切にする金子さんの基本は変わらない。とにかく今は、工芸の世界に深く分け入っていくことが目の前の課題である。

高岡'97クラフトコンペグランプリ「花器」

金子 透（かねこ とおる）工芸家

1962年 東京都生まれ
1988年 東京芸術大学大学院美術研究科彫金専攻修了
1991年 日本クラフト展入選
高岡クラフト展入選
金沢工芸大賞コンペティション入選
1992年 Talentborse Handwerk 1992展（ミュンヘン）
1993年 The Art of Jewelry展優秀賞
高岡クラフト展審査員賞
1995年 コンテンポラリー　ジュウリー展
（ゲント市装飾美術館、東京都近代美術館工芸館）
高岡クラフト展銀賞
国際デザインフェアINみやぎ審査委員賞
1996年 個展（ワコール銀座アートスペース）
日本クラフト展優秀賞
使ってみたい北の菓子器展優秀賞
1997年 朝日現代クラフト展奨励賞
高岡クラフト展グランプリ
現　在 東北芸術工科大学講師
社団法人日本クラフトデザイン協会会員

MADE IN TAKAOKA SELECTION

「メイド・イン・高岡」セレクション

「モノづくりの町」と形容されるとおり、いま高岡では、新技術を駆使してデザインされた商品やコンペ入賞作品を商品化したプロダクトなど、素材、技術、デザインにこだわったモノがいくつも生まれています。その中から、暮らしを楽しく彩る商品をセレクトしました。使い心地のいい「お気に入り」、こだわりの高岡ブランドの中から見つけてみませんか。

2 サッカー日本代表・'98仏W杯公式靴下

念願のW杯出場を決めブームが再燃した日本サッカー。ファンならずとも必携のソックスをラインアップしました。デザインは、日本代表チームとFIFAワールドカップ'98の2種類。

●サイズ／19～21cm、22～24cm●価格／390円・490円●問合せ／助野靴下㈱高岡支店 ☎0766・26・3001

1 WALL CLOCK「AK1-701」

モノトーンでシンプルだけど、どこかユーモラスなデザインクロック。インパクトのある文字盤と針が、いつもしっかり時間を教えてくれます。第36回富山県デザイン展の入賞作品（島沢和美子さん）を基に商品化したものです。

●サイズ／φ32.0cm×D3.5cm●重量／970g●主材／ABS、ガラス●カラー／BL（ブラック）●価格／5,000円●問合せ／㈱タカタレムノス ☎0766・24・5731

3 ベビー服「Hello Kitty Babies」

お馴染みのハローキティーから、かわいいSistersバージョンが誕生。まだまだアンヨができないミルクベビーたちへ、優しいママの温もりを込めて…。"着心地の良さ"に"可愛らしさ"をプラスしてお届けします。

●サイズ／80～90cm●素材／ブラウス…ビエラギンガム、ジャンパースカート…デニム、トレーナー…裏毛、クロッシェ…シャツコール●価格／ブラウス…2,900円、ジャンパースカート…2,600円、トレーナー…2,900円、クロッシェ…3,300円、靴下…580円、靴…2,300円●問合せ／㈱クレア・コーポレーション ☎0766・36・1234

4 装飾タイル「IK-201」

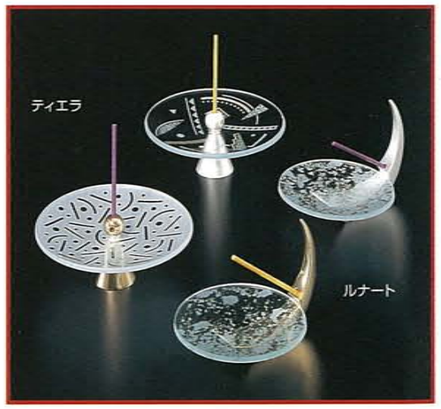
建物やストリートに独特のパターンを描くブロンズ製エクステリア。街並みに美しく映えるテクスチャーがアクセントになって、印象的な景観を演出します。

●サイズ／W14.7cm×H14.7cm×D0.5cm●仕様／ブロンズ●価格／3パターン9枚セット…28,000円・組合せ自由1枚…3,200円●問合せ／高岡銅器団地協同組合 ☎0766・63・5005

5 アクアシリーズ「水の漆器」

プロダクトデザイナーの澄川伸一氏が、水をテーマにデザインした漆器シリーズ。もてなし皿は、コーヒーにお菓子を添えたり、オードブルをのせてすすめるのもおしゃれ。気軽に伝統の良さを使いこなしてみませんか。

●サイズ／丸盆…φ30.0×H2.0㎝、小判型もてなし皿…W33.0×H17.5×D1.0㎝、長角もてなし皿…W28.0×H14.5×D1.0㎝●素材／木製・カシュー仕上げ・溜塗●価格／丸盆…5,000円、小判型もてなし皿…4,500円、長角もてなし皿…4,000円●問合せ／天野漆器㈱ ☎0766・23・2151



7 香立て「ティエラ＆ルナート」

小宇宙、あるいは月と太陽をイメージさせるクリスタルな香立て。デザインはガラスで素敵な世界を表現する趙慶姫さんで、'96高岡クラフトコンペの入選作品を商品化したものです。

●サイズ／〈ティエラ〉φ9.0×H4.0㎝〈ルナート〉W9.0×H5.5×D7.0㎝●素材／ガラス・黄銅●カラー／シルバー、ゴールド●価格／3,900円～4,700円●問合せ／㈱ニューズ・インターナショナル ☎0766・28・2210

6 ガラスアートのドアノブ「銀雅堂」

触覚と視覚に、新鮮な美しさを感じさせるドアノブとレバーハンドル。チェコ在住のデザイナーで、富山ガラス造形研究所の客員教授を務めたウラジミル・クライン氏がデザインしました。

〈LEMON〉●サイズ／φ7.0×5.7㎝●価格／200,000円〈MIZU NO WAKUSEI〉●サイズ／6.5×6.5×6.2㎝●価格／200,000円〈KORI〉●サイズ／4.2×15.7×3.7㎝●価格／260,000円 ※サイズはガラスのみ、価格はすべてペア●問合せ／銀雅堂 ☎0766・31・5225

8 腕時計「カオス」

黒川雅之氏（建築家・プロダクトデザイナー）デザインの腕時計は、二つの文字盤で常に二カ国の時間が分かる優れモノ。昼夜の区別も小窓の色で瞬時に判断できるから、海外出張やバカンスなどで大活躍してくれそう。

●サイズ／W5.5×H23.0×D1.0㎝●素材／チタン製、本皮ベルト●文字盤デザイン2種類●価格／50,000円●問合せ／㈱竹中製作所 ☎0766・22・0566

●商品の仕様については、予告なく変更することがございます。また、掲載されている商品の色は、撮影や印刷などの諸条件により、実際と多少異なる場合がございます。あらかじめご了承ください。●表示価格には消費税は含まれておりません。●表示価格は平成10年3月現在のものです。